

東西交渉史論、三十一篇中西洋史關係のものを一二紹介したい。

一、波斯戦役の性格

原 隨 園

この論文は波斯戦役に關する單なる事實の叙述ではない。西洋史上に於ける最初の東西民族の衝突たる波斯戦役のもつ特異性を、主としてヘロドトスを中心として、新たに解釋つけられたものである。

幾多の問題を含む波斯の「スキタイ遠征」は、小亞細亞海岸地方に居住せる希臘人が黒海方面の商利を確保せんが爲に政行さしたもので、之によつてトラキヤ・マケドニヤ方面に侵出して希臘の北部を押へ、波斯の「リビヤ遠征」ゾホイニキヤ人を中心勢力として、この方面の希臘人を驅逐して希臘を南方から包圍したもので、南北からの包圍策が完成した時、殘る問題は中央突破が考へられる。それがナクソス遠征である。ミレトスのアリスタゴラス

はナクソス遠征の張本人であるが、實はこれを機會に波斯からの獨立を希求したもので、この遠征に失敗するや彼は野心の暴露を恐れ、遂にイオニヤの叛亂を起すに至つたといふ極めて微妙なる内的原因を明快に剔抉せられ、波斯戦役の正に起るべき前日の大局をかかも功緻に把握したものは未だ嘗つてなき所で、本論文の主眼となるべき所である（七一―九節）。

次いでアテネは求援に應じてミレトスを助けた。然しそれは小亞細亞の同胞を助けんとした意味合のものではなく、アテナイ内部に於ける黨派對立の結果であるとし、「アテナイの對波斯政策は内訌と共に支配され常に浮動的であつた」（五十二頁）ので、希臘

を通じて共同政策などは勿論なく、希臘存亡の危機に際しても、その充分なる認識を持つてゐなかつた。

従つて波斯戦役が後人の言ふが如き希臘人の民族愛・祖國愛の精神から戰はれたものであるとする考は甚だしく疑問であるとし、希臘人對蠻人の對立感から希臘人の優越感が生れるのは、やつとサラミスの海戰に決定的勝利を得てから後のことである。

ヘロドトスの思想を培つたものはこの時代の思想である。故にアテナイが希臘人の自由を擁護し、希臘の救主であつたと傳へられたとしても（VIII, 139）、それはその時代の信念を語つてゐるのであつて、アテナイが最初から祖國のために戰はんとしたものはないとして（五十七頁）、希臘人の祖國觀念・民族意識の缺如を遺憾なく論斷されてゐる。

二、第一回日英同盟の成立とドイツ帝國 時野谷常三郎

本論文は三國同盟締結後のドイツの對英政策の破綻から日英同盟の締結となる外交上の變動を極めて精細に論述されたものである。

日英同盟の特質とは、清韓兩國に於ける政治的經濟的利權を維持し、清國に於ける英國の經濟的利權を擁護するものであるが、何故に英國は多年の *Kristantentheorie* を棄て、東亞の日本と相結ばんとするに至つたか。

ビスマルクはフランスの復讐に備へる爲に三國同盟を結んだが更にその強化を計る爲、一八八七年英首相ソールズベリーに向ひ、英國との同盟協力を俟つべき必要の多大なることを申込んだ

が英首相の返答は「逃避的拒絶」であつた(四頁)。

よつてビスマルク辭任後の宰相ホーヘンローエは敵國なる露佛同盟に近づき、その國際的地位を安固にするため斷行したのが三國干渉である。ドイツ外相フォン・マーシヤルはドイツ代理大使をして露の外相に向つて、「日本が單にかくして朝鮮の獨立を擁護するを標榜して旅順口並にその背地を請求するは危険である。かゝる見地に從へば、旅順口は第二のジブラルタルと化し、日本は渤海灣の支配者となり、事實これに依つて支那を日本の保護領化するものであらう。かゝる法外な要求こそ、その結果歐洲の平和を脅すに至るであらう故、心配を以てこれを眺めざるを得ない」云々と進言して(九頁)、日本に干渉をすゝめ、ドイツ自らその間に投じて利權獲得の均衡を計り、消極的には露の勢力を東洋に向けて、三國同盟の勢力の維持を計つたのである。我が國は萬斛の恨を呑んで遼東半島を抛棄したが、ロシアは虎視眈々清韓の獨立を危くし、我が國防第一線に迫るに至つた。

この時に當り「必要なる軍備を爲すべきは勿論可成は今に迫むて英國に結托し他日其助力を得候様に致し置度ものと存候」として日英同盟を初めて公に説いたのは露都駐劄西特命全權公使であり(二十九頁)、林董駐英公使等である。かくて我が國では三國干渉後、日英同盟締結の氣運が急激に昂められつゝあつた。

一方英國では、日清・北清の兩戰役後逐次昂進し來る支那方面への露の進出に多大の不安を感じ、剩へ南亞の情勢險惡を告ぐるものがあつたので、この際、多年の「光榮の孤立」を棄て、同盟

依存の氣が動いた。さてこそ一九〇一年以降英獨協商の議論俄然として隆頭し、ドイツは英國の三國同盟への加入を慫慂した。然し英外相ランズダウンの考慮せる同盟は單なる英獨協定にあらずして日・英・獨三國協定であつた(二十二―三頁)。英の殊に切望したのは問題が東亞に存する以上新興日本を同盟にひき入れることであつた(三頁、二十一―三頁)。

然るにドイツ側では日本の加入を喜ばなかつた。それは日本の對獨感情が三國干渉以來未だ釋然たらざるものがあつたからである。且つ、英國としては三國同盟の一員ではあるが、民族問題から没落に瀕してゐる墺國の爲に、その責任を負擔することを恐れ、伊太利との提携も亦モロッコ・地中海問題で佛や西と衝突する恐れがあつて何れも躊躇せざるを得ない。結局、英國の三國同盟加入は、英の拒否するところとなり、一九〇一年の暮までに雲散霧消の姿となつた(二十八―三十頁)。

英獨協商破綻後のドイツは英國を棄て、進んで露と提携するかその去就は頗る疑問とせられ、極めて曖昧なる情勢にあつた。この際、我が伊藤侯一派は「若しドイツが露・佛側に傾くか或は中立の態度を執るやうな場合」日露の接近を計り、一時的にも戰の慘禍を避け、徐ろに後圖を策せんとし(四十八頁)、桂首相一派は英國の要望に應じて、英國との提携を策した。かくて一九〇一年の暮、伊藤侯はパリに至り、英を通らず直接ロシアに赴くに及び、日露協商の日英同盟に先んじて生れることを惧れ、英國政府の焦慮となり、却つて日英同盟論に拍車をかくることゝなつた。

かくて遂に一九〇二年初頭、同盟の成立となつた所以を内外の史料を縦横に駆使して、精に入り微を穿つて論述されてゐる。

支那事變勃發して既に二ヶ年、本年六月十四日、遂に天津英租界は我が軍に遮断さるゝに至つた。英の支那に於ける權益は日英同盟の破棄以來、擁護者を失つて不安の情況を繼續しつゝけたが、今や徹底的打撃を蒙るやも計り難き今日、博士の明快・精緻なるこの論文に接し、僅か三十七年前締結された日英同盟を追憶する時歴史の變動の急激なるに感慨なきを得ない。

三、「エリュトラ海案内記」に見えたる紀元一世紀の南瀕貿易（村川堅太郎）、東西交渉史上に於ける十字軍の意義（山中謙二）、文化史上に於ける佛蘭西東洋政策の環繞（長壽吉、露國の東亞政策と列強（齋藤清太郎）、米國の東洋政策（新見吉治）等は専門の大家が夫々の分野に於ける研鑽を公表された好論文であるが、その内容紹介は紙面の都合上割愛する。（吉原好人）

（菊判上下二冊、一四三八頁、昭和十四年五月、東京富山房發行。定價七圓五十錢）

滿洲金石志稿 第二冊

園田 一 龜編

『滿洲金石志稿 第一冊』が發行せられたのは、去る昭和十一年四月のことであつた。それは第一期 高句麗渤海時代、第二期 遼時代、第三期 金時代、第四期 元時代の四期に分たれ、周到に筆録せられた金石文そのものはいふまでもなく、各金石文ごと

に、その存在の狀態、變遷等述べてゐる「略解」、参考書目をあつめた「文獻」の項によつて、われ／＼の蒙つた恩恵は實に大きいものであつた。今また、その第二冊を手にすることのできたのは、學界のために慶賀に堪へない。

本書は、第一冊の第四期 元時代にひきつゞいて、「第五期 明時代」百四十九種を採録し、その一つ／＼に、「略解」「文獻」の項を附してゐることは、第一冊と同様である。

明の政令の及んだのは、開原を極邊とする邊境以南に限られてゐた。その關係上、本書に載せられたものは、明初滿洲東北方面の經略を記念する吉林・阿什哈達の摩崖碑と、黑龍江畔チルの奴兒干永寧寺碑とを例外として、すべて右の地域内のものであり、北鎮・遼陽・鐵嶺に存するものが最も多い。その種類は、寺廟關係のものが多くを占め、墓誌銘がこれに次いでをり、史的價値の高いものが少くない。

滿洲に於ける金石文を蒐録したものとせば、この志稿第一冊刊行後に公にせられた羅振玉氏の『滿洲金石志』が各時代にわたつて蒐録したものとして重寶がられてゐる。しかし、園田氏の志稿の強味は、たゞ在來の拓木類を手録するといふ從來行はれてゐた方法にあきたらないで、事情の許すかぎり、その現地に赴いて、碑石を精密に調査し、拓ちながら讀むといふ方法をとつてゐることである。しかも、志稿第二冊は、その分布範圍が滿洲の南半分に限られてをり、比較的現地調査を行ひやすいといふ状態にあるために、第一冊に比して、編者自らの調査を経たものがはるか